

「むりをしない」「むだをしない」 「むらをつくらない」養豚経営への挑戦

—群馬の中山間地域が育んだ「榛名ポーク」—

株式会社 オーケーコーポレーション(養豚・群馬県榛東村)

地域の概要

株式会社オーケーコーポレーション（岡部幹雄代表取締役）は、本社を群馬県のはぼ中央にある北群馬郡榛東村に構え、渋川市に主力となる赤城農場、吾妻郡中之条町に肥育の大原農場と繁殖豚生産の伊参農場の3農場を有し運営している。

3農場とも標高700mの高原に位置し、きれいな空気と水があり、特に飲水は山からの天然水が利用できる恵まれた環境にある。

地域概況は、赤城農場のある渋川市は、こんにゃく、ピーマン、ほうれん草などの生産が盛んなほか、畜産は同市の農業産出額（259億円）の半分を占める125億9000万円の産出



(写真1) (右から) 岡部幹雄社長、岡部康之副社長

を上げ、畜種別では肉用牛9億6000万円、乳用牛9億8000万円、養豚61億3000万円、養鶏45億2000万円と養豚が重要な位置にある。農場のある赤城村には養豚団地もある。

大原農場・伊参農場のある中之条町はこん

(表1) 経営・活動の推移

年次	作目構成	飼養頭(羽)数	飼料作付面積	経営・活動の内容
昭和37年	養豚	子豚300頭導入	無	父親が肥育専門の養豚経営開始
昭和44年5月	養豚(一貫)	繁殖豚500頭		・赤城農場を建設。繁殖豚500頭に規模拡大し、一貫経営となる。会社を法人化
昭和47年	〃	種豚1210頭		・赤城農場で飼養する繁殖豚を生産するため伊参農場を建設
昭和49年	〃	肥育豚5000頭		・肥育農場として大原農場を建設。赤城農場で生産する子豚の半数を大原農場で肥育
昭和52年	〃	総頭数2万2000頭		幹雄氏が大学卒業と同時に岡部養豚(現オーケーコーポレーション)に入社
平成元年	〃	総頭数2万2000頭		幹雄氏(35歳)が代表取締役役に就任。経営的に採算の合わない豚肉直販部門の経営を中止、養豚経営に集中する
平成6年	〃	総頭数2万2000頭		赤城農場の分娩舎を高床式に改造 赤城農場の育成豚舎を増築
平成13年	〃	総頭数2万2000頭		株式会社オーケーコーポレーションへ社名変更
平成17年	〃	総頭数2万2000頭		自社産の豚肉「榛名ポーク」の商標登録
平成29年	〃	総頭数2万2000頭		現在に至る

にゃくを基幹とした複合経営が主体で、畜産産出額は10億9000万円。特に養豚経営は15戸で約5万2800頭を飼養し規模拡大が進んでおり、衛生管理を徹底した安全で良質な豚肉生産が行われている。

経営・活動の推移

【合理性・安全性を追求、拡大化を図る】

養豚経営は、岡部幹雄さんの父が昭和37年に子豚300頭を導入し、肥育専門経営から始めた。44年には、赤城山麓に繁殖豚約500頭規模の一貫経営「赤城農場」を建設。47年には繁殖豚の改良増殖と安定供給を確立するため、経営内で自家育成する「伊参農場」を中之条町に建設。種豚150頭飼養規模の農場とした。49年には赤城農場で生産した肥育豚の一部を飼養するため、5000頭規模の肥育農場「大原農場」を中之条町に建設し、3農場全体で、繁殖豚2000頭、肥育豚約2万頭飼養規模の大規模一貫経営を完成している。

昭和52年に、幹雄さんが大学卒業と同時に岡部養豚（現株オーケーコーポレーション）に入社し経営の一翼を担う。しかしその後の畜産を取り巻く経済環境は厳しく、自身の養豚経営も急速な規模拡大による借入金によって大変苦しい状況であった。幹雄さんは社長に就任すると不採算部門の直販部門を見直し、養豚部門だけに集中して経営の立て直しを図った。

平成6年には、赤城農場の旧式分娩舎を高床式に改造、赤城農場の育成豚舎も新しく建

設して生産性の向上に努め、以降「むりをしない、むだをしない、むらをつくらない」経営方針で無借金経営を行っている。12年には、21世紀に向けて発展するよう「株式会社オーケーコーポレーション」と社名を変更。17年には、自社ブランドの「榛名ポーク」を商標登録して販売にも力を入れている。

また、換気扇や分娩室の非常用電源装置を備えるなどして緊急時にも対応できる体制も整えている。

経営管理・生産技術の特色

【自然環境を利用したストレスのない飼養】

写真2は赤城農場の現在の写真である。1800頭の繁殖豚と1万3000頭の肥育豚がきれいな空気と天然水を利用して健康に飼われている。飲水には湧水をポンプアップし利用している。他の2農場も同様に、きれいな空気と、山からの天然水を利用できる恵まれた環境にあり、ストレスなく豚を飼養している。

また、大原農場には敷料としてのオガクズや堆肥を保管するための倉庫を8棟整備し、キノコ菌床利用のオガクズを豊富に使用している。豚房では、敷料を敷き詰めたエリアの片面はスノコやコンクリートにして、餌と水を飲む場をきれいに維持する豚舎構造としている。また、出荷間際には全面スノコで飼養し、豚体をきれいに保つ。環境面でも、ふん乾燥処理施設や堆肥舎、尿汚水浄化処理施設などの機械施設を整備して、周辺への環境負荷を軽減するための配慮がなされている。

(表2) 3農場の経営規模

農場名	(頭)				(人)	
	繁殖母豚	雄豚	子豚	肉豚	合計	作業員
1. 赤城農場	1,800	15	6,000	7,000	14,815	20
2. 大原農場	—	—	—	6,000	6,000	5
3. 伊参農場	150	30	1,000	—	1,180	5
計	1,950	45	7,000	13,000	21,995	30

【飼育管理の工夫で収益性の向上】

3農場は相互に分業と連携を図り、より収益向上に努めている。

繁殖母豚の年間平均分娩回数は2.32回と高い水準にあり、母豚1頭当たりの正常分娩子豚頭数は11.5頭、離乳子豚頭数は10.7頭で哺育育成率は93%。

また、離乳から出荷までの事故率は6.5%の水準にあり、母豚1頭当たり出荷頭数は22.7頭と安定した成績を収めている。

肉豚出荷日齢は190日で枝肉重量74.3kg、上物格付け率は65%と高い水準にある。

【安全・安心・おいしい豚肉づくり】

消費者が安心して食べられるおいしい豚肉作りを心掛け、特に肥育後期用の餌は、飼料メーカーと検討を重ね独自に開発してもらった飼料を使う。カロリーや油脂分の高いトウモロコシは使用せず、デンプン質の多いマイロやタピオカ、麦を主成分とし、トウモロコシ配合よりやや高めの単価だが、ビタミンEや肉のうまみ成分となるオレイン酸が多く含まれ、甘みのある肉質となる。

こうした努力が実り、「榛名ポーク」は地元スーパーで広い売り場を確保し消費者に提供され、美しい肉色や脂の甘み、きめ細やかな食味が支持され、高い評価を得ているほか、

地元榛東村の「ふるさと納税協力品」にもなっている。

【労務管理、経営の計画性と経営改善成果】

役員構成は社長の幹雄さん、副社長で実弟の康之さん、それぞれの妻の4人である。社長の娘の夫がほかの養豚農場で研修中で、1年後には経営に参画予定。副社長の息子2人も従業員として経営に参画している。また、康之副社長は群馬県養豚協会の会長で、日本養豚協会の群馬県理事としても活躍している。

従業員の業務は、担当制に分担するなどして作業の効率化に工夫が凝らされている。特に従業員の多い赤城農場では、従業員を①交配、②分娩、③肥育、④堆肥の4チームに分け、チームリーダーの下に飼養管理を行うほか、担当業務を数年ごとに交代して、どの業務にもつけるようにしている。

また、管理獣医師が各農場を定期的に訪れ、月に1回開催している従業員のミーティングで飼養管理等の指導を行っている。

赤城農場で飼養する繁殖母豚は、伊参農場から優秀な母豚を選別して供給できる体制にあり、農場間の人や物の出入りについても厳しい制限を設けて、衛生対策には十分な管理が行われている。

平均分娩率は90%程度と高く、年間総出荷



(写真2) 赤城農場

(表3) 経営実績 (平成29年)

経営の概要	労働力員数 (畜産・2000hr換算)	家族構成員	1.1人		
		従業員	27.5人		
	種雌豚平均飼養頭数		1,930.0頭		
	肥育豚平均飼養頭数		12,582頭		
	年間子豚出荷頭数		170頭		
収益性	年間肉豚出荷頭数		44,408頭		
	所得率 (構成員)		24.1%		
生産性	繁殖	種雌豚 1 頭当たり生産費用	615,416円		
		種雌豚 1 頭当たり年間平均分娩回数	2.32回		
		種雌豚 1 頭当たり分娩子豚頭数	32.1頭		
	肥育	種雌豚 1 頭当たり子豚離乳頭数		24.6頭	
		種雌豚 1 頭当たり年間肉豚出荷頭数		23.0頭	
		肥育豚事故率		6.5% (離乳時からの事故率)	
		肥育開始時	日齢		23日
			体重		6.8kg
		肉豚出荷時	日齢		192日
			体重		115kg
		平均肥育日数		169日	
		出荷肉豚 1 頭 1 日当たり増体重		0.640kg	
		トータル飼料要求率		3.28	
		肥育豚飼料要求率		2.69	
		枝肉重量		74.3kg	
販売	肉豚 1 頭当たり平均価格		38,392円		
	枝肉 1 kg 当たり平均価格		558円		
	枝肉規格「上」以上適合率		63.5%		

頭数は約4万4000頭。繁殖母豚1頭当たりでは23頭、出荷豚1頭当たりの純利益は9283円と高い収益性を実現している。

また肉豚の販売のほか、子豚の出荷や堆肥の売上げがある。

経営収支は日ごろから記帳し、現状の経理状況を分析・把握している。

耕畜連携の活動

洪川市に隣接する利根郡昭和村は、日本有数の高原野菜の産地であることから、野菜農家約20戸、150haに年間3000tの堆肥を供給し、耕畜連携の役割を果たしている。堆肥舎で発酵処理した堆肥は、野菜農家が直接取りに来た場合は無償、圃場まで搬送する場合は運搬費(1000円/2t車)程度で販売。そのほか、稲作農家とは堆肥とモミガラとの交換により豚舎敷料を確保するなど、地域農家と

の連携を深めている。

今後も、3農場に隣接する耕種農家との連携を強め、堆肥を安定的に地域供給していくために、平成30年末には散布車を購入する予定だ。

地域に対する貢献

【地域農家との連携による畜産環境対策】

環境対策には十分な配慮を行い、ふんおよびふん尿混合物は乾燥処理後、堆肥舎で発酵処理し堆肥化する。尿汚水は、貯留槽で調整した後、乾燥処理施設に散布することで処理している。

特に、野菜農家が求める良質な堆肥を生産するため、堆肥は2~3年かけて発酵させ、熟成度の高い安定した成分の粒子の細かい良質完熟堆肥を生産している。堆肥施設は、長期間の発酵処理に対応できるよう、ゆとりある大きさを確保している。

また、余剰堆肥は戻し堆肥として自家利用する。オガクズを混ぜて肥育豚舎の敷料として利用し、敷料購入量の軽減を図っている。

【地域雇用への貢献】

30人の社員がおり、年齢層は25歳~70歳までと幅広く、最年長のスタッフは勤続40年を超え、働きやすい職場となっている。社員は



(写真3) オガクズを敷料に健康に育つ肉豚



(写真4) 赤城農場の堆肥舎と完熟堆肥

農場のある渋川市、中之条町だけでなく、周辺の高崎市、前橋市からも通勤しており、地域の雇用に大きく貢献している。また、県外の千葉県や大阪府から、大学を卒業した若手社員が就職している。

生活の視点の配慮について

【男女共同参画社会への取り組み】

女性社員は5人雇用しており、女性専用のシャワー室の増設など、女性が働きやすい職場作りを行っている。今後も女性社員を積極的に採用していくことを目指している。

また、職員が仕事への向上心や、やる気につなげるよう、さまざまな研修会へ参加できる体制を整えている。雇用保険、労災保険、健康保険、厚生年金の社会保険も完備している。



(写真5) 地元スーパーには5mに及ぶ「榛名ポーク」の売り場がある

将来への方向性

【次世代への継承（経営の継続性）】

社長の方針で、働きがいのある職場環境づくりや従業員間のコミュニケーション・雰囲気大切にしている。その結果、20代・30代の若い職員が約半数を占め、離職率も低い。

将来的には、経営管理は次世代へ移譲し、さらなる経営強化と魅力ある養豚業を目指していく。

【今後の経営計画】

「養豚経営は生きた豚が相手ですから、豚自らの力で育っていくように管理することが基本。特に気を使っているのは『水』と『えさ』と『空気』、新鮮な水がいつでも飲めて、新しく適正なえさが常時食べられ、きれいな空気が吸える環境、そうした環境づくりが大事だと思っている」。これが社長の基本理念であり、これを継続・発展させることが今後の経営を続ける上で、もっとも重要であると考えている。

飼養規模は現状維持の状態、優良種豚の確保や飼養環境の改善、事故率の低減、畜産環境対策を充実することにより「むりをしない、むだをしない、むらをつくらない」経営を目指す。



(写真6) 意欲ある若い従業員